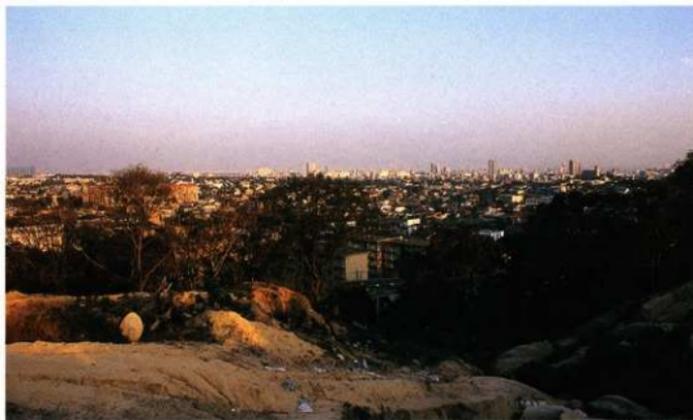


**C地区谷2左岸尾根突端部からの遠景
(西から)**

手前に西宮市街地を、奥に大阪の高层ビル群を眺む。発掘調査の現場は沖積地と指呼の間にある丘陵地である。江戸時代当時は、上町台地の上に大板城の天守閣が見えたに違いない。



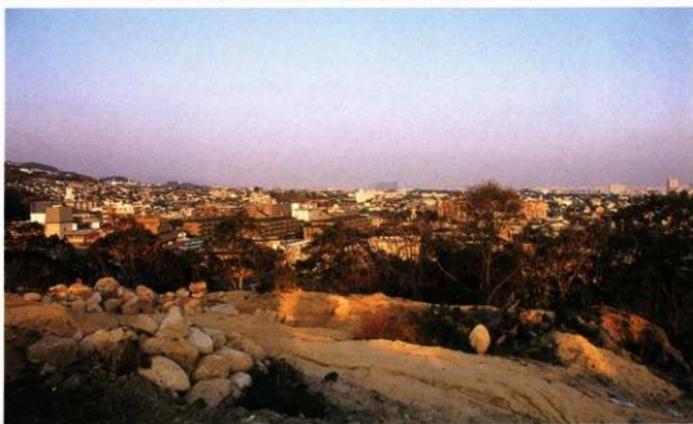
C地区谷2調査前の状況 (西から)

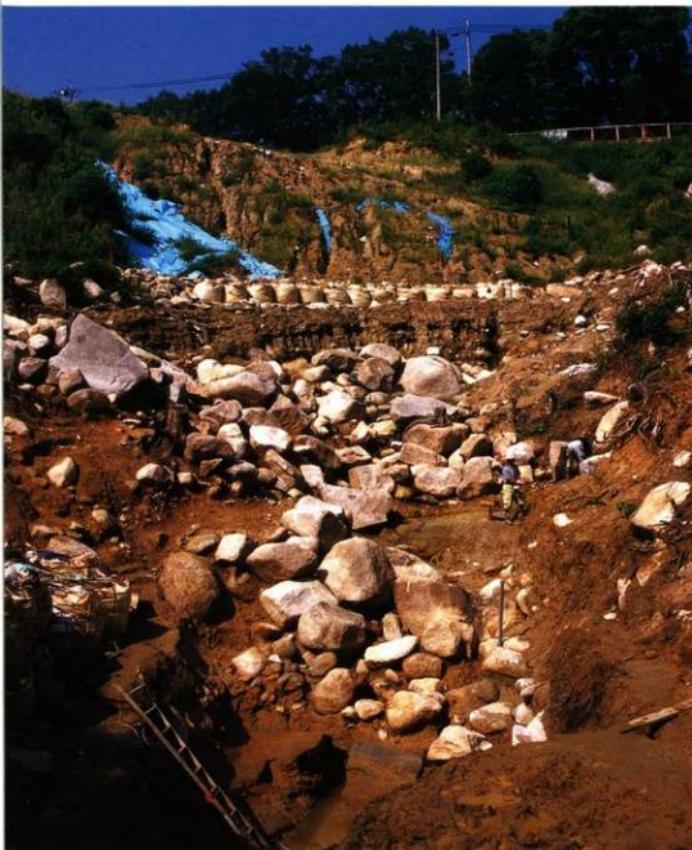
草木が繁茂し、トレンチを抜くまでは、流水の痕跡はうかがえなかった。深い閉新谷もかなり埋まり、底地に沢を形成していた。



B地区段丘縁の遠景 (西から)

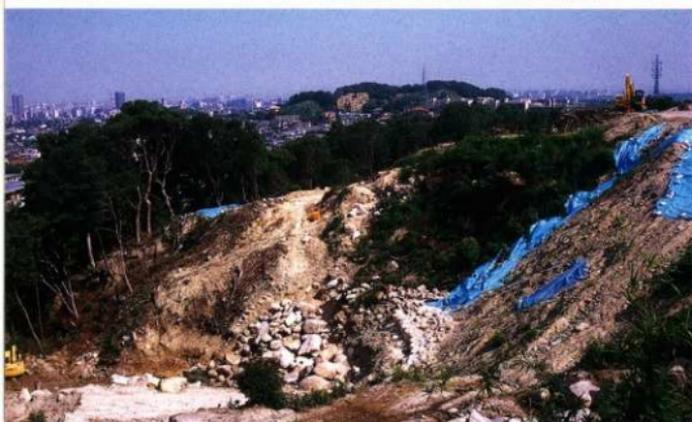
C地区谷2左岸尾根よりB地区第21地点を望む。この台地の上でも花崗岩は数多く出土したが、加工石材は少なかった。西宮市の市街地が一望できる。





**A・D地区 谷1遠景
(谷尻から谷頭を望む)**

谷底に密集する巨礫群を母材とした谷丁場が展開する。43・49～53号石材などこの丁場を代表する測石が至近距離で原位置を保って遺存していた。花崗岩の巨礫は人の大きさからもうかがえるように、直径1.5～3.0m大のものがまさにゴロゴロと存在した。2～3mの厚い造成土を除去して初めて姿を現した場所もある。2段階のトン袋を置き、防災措置を施して、この石切丁場は発掘された。上方斜面には流出しやすい大量の造成土がみえる。



**A地区 谷1左岸上方から全体を望む
(北西から)**

右手側斜面に造成盛土が迫り、谷底には巨礫が密集する。本発掘を進め始めた頃の石切丁場跡。この谷の底にこれだけの有用石材が埋もれていたことは、なかなか想像できない。完全に埋もれる前に造成工事が中断したことが幸いし、遺構の検出に至った。多くの転石を利用した丁場である。



A地区谷1 確認発掘開始状況(南から)

伐採木を取り除き、残土スペースを確保する。谷1の底を発掘するには、かなり周辺での準備が必要であった。造成上が谷の大半を埋め、流水も多く、この谷での遺構検出は当初から困難が予想された。



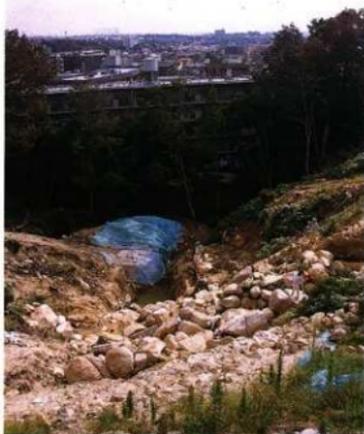
A地区谷1 本発掘前の防災状況(北西から)

トン袋を谷底の丁場の上方外周に2段積で並べ、造成盛土の流出を防ぐ措置をとった。本発掘に備えての安全対策の状況。



A地区谷1 石切丁場発掘調査状況(北東から)

中央に49・50・81号石材、左手に43号石材、左手奥に41号石材を検出した。また、右手には51・52号石材が存在する。谷一帯に巨石がゴロゴロと横たわる姿で出てきた。元和～寛永期の当時には、沢状の地形に丁場が立地していたのだろう。



A・D地区谷1の石切丁場(西から)

谷底の完掘状況で、谷頭から谷尻の比高差は30mに近い。谷の先には老松住宅が見える。その向こう側には、夙川沿いの並木が列をなす。



A地区谷1 石切丁場発掘調査状況(北から)

右上に81号石材、手前左寄りに108号石材が位置する。左岸上方から撮影。



D地区谷1 北東壁断面(南西から)

大阪層群(黄灰色泥～細粒砂)をベースとして、河床に巨礫が充塞する。



A 地区 81 号石材 (矢穴石) 検出状態 (北西から)

右下 1/4 は検出時には割れており、おそらく元和・寛永期の採石段階で失作品となっていたであろう。中央二分割製の技法を採る矢穴石。第 120 図の I-1 型である。



A 地区 53 号石材 (矢穴石) 検出状態 (南から)

矢穴列に沿ってヤマトリが施される (矢穴列両脇のチョークライン)。表面の弱い花崗岩を幅 20~30 cm 1 段削いで、固い面に矢穴列を配備する。削石の技法は、第 120 図の I-1 型。



A 地区 49・50 号石材 (右上) と 81 号石材 (左下) (南東から)

等高線に平行に矢穴列を穿ち、下手側が自重で割れるのを目論んでいるのでは (49・50 号)。両石材とも矢穴列の方向性は同じである。



A 地区 53 号石材のヤマトリと矢穴 (北から)

球形を呈する石材の中央に矢穴列を設定し、二分割の削取りを志向する。上の写真とは真反対方向から撮影。ヤマトリは深さ 3 cm 未満。



A 地区 82 号石材 (矢穴痕をもつ端材) (東南東から)

削面は著しく平滑で、かつかり長石の目立つピンク色の当石材は、六甲花崗岩の諸特徴を顕著に表している (第 67 図)。



A 地区 50 号石材 (矢穴断面) (東から)

矢穴断面からも矢底の丁寧な仕上げが観察できる。岩肌から芯部に向かって玉葱状風化が見られるが、ヤマトリは行っていない (第 53 図)。



A地区

42号石材検出状況

2本の矢穴列の間隔は65cmを測り、石材の規格を知る上で、重要な資料である。

矢穴以外に手を加えた形跡の認められない自然石で、高さ約1.5mを測る。段丘層中の玉石を選択して、築石を採取しようとしたもののなか。

矢穴は高密度であけられており、元和～寛政期の典型的な形制を保つ(第86・125図)。



A地区谷1 49・50号石材検出状況(西から)

中央二分割技法による截断を行っている。こうした単純な割石法は、この谷丁場を中心に数多く確認された(第120図I-1型)。



A地区谷1 49・50号石材検出状況(南から)

果実を真っ二つに割ったようだ。断面で玉葱状風化が観察できる。49号石材が横倒しとなっている。谷丁場発見の契機をなした石材。



A地区谷1 52号石材検出状況(西から)

上部は自然面、下面が割面で、Aタイプの矢穴痕が観察できる(第63図)。



A地区谷1 124号石材検出状況(東から)

小口面と2側面に割面を持つ端材である(第69図)。



D地区確認調査トレンチ発掘作業風景（西から）
難渋する掘削と排水措置。湧いてくる谷水（P 54～55）。



D地区確認調査トレンチ発掘状況（西から）
谷底に散見される巨礫の遺存状況と深部に大阪層群が露呈。



D地区確認調査トレンチ土層断面（北から）
下位が大阪層群を母材とする谷底の埋積土（第61図）。



A地区谷底108号石材付近検出状態（東から）
断面は精緻であり、ピンクの色調が顕著な108号石材（図版表紙）。



A地区第108号石材（Aタイプ矢穴列痕）（東から）
裏面は自然面をなす端石であり、前面は平坦で美しい。



A地区第86号石材とAタイプ・Cタイプの矢穴痕（南から）
AタイプとCタイプの矢穴列の切り合い関係が同一面で観察できる。



D地区谷1ベース層内（大阪層群）出土木製遺物（北から）
粘土質シルトにバックされており、遺存状態は良好である。



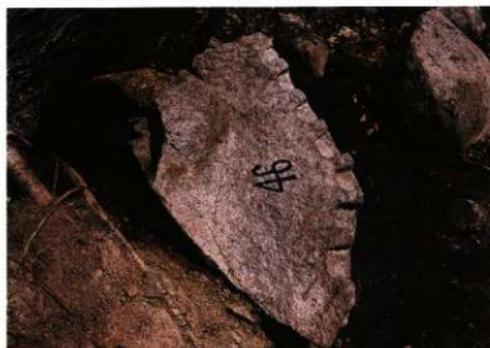
D地区谷1ベース層内（大阪層群）縦断トレンチ（南から）
粘土・シルト・微粒砂の互層をなすラミネーションが顕著である。



A地区 54・55号石材検出状況（北東から）
矢穴痕を持つコッパであり、当地での採石活動を裏付ける。



C地区 117号石材検出状況（東から）
Aタイプの矢穴痕を持つ残材で、間知石に転用されたものであろう。石垣1～5を中心にこうした元和～寛永期石材の転用例が数多くみられた。石切丁場に里山の耕作地を切り拓いた人々が入り、土地の改造を企てたようすが知られる。



A地区 46号石材検出状況（南から）
Aタイプの矢穴痕を持ち、石材外形線に対して垂直に矢穴を穿っている元和～寛永期の割石端材。近くに石切丁場があったとみていい。



A地区 45号石材検出状況（南から）
石の目と矢穴列が違い、断面が多面形を呈する尖作品である。割っても利用できない異形石材がたくさん生みだされた。



A地区 47号石材検出状況（南から）
推定石曳き道の脇で検出した石材で原位置は保っていない。端石の一例。



C地区 130号石材検出状況（南西から）
Cタイプの矢穴痕を持つ割石で、Aタイプの矢穴痕と比較してビッチが広いことがわかる。



A地区 第12地点83号石材検出状況(東から)

端材であり、原位置は保っていない。谷の流路中心部付近から出土した。谷を埋めた造成土も厚い。第68図参照。



A地区 谷1左岸断面(東から)

右下が大坂層群。谷1の埋積土は廃棄物(樹木・石含む)で厚く覆われていた。これらの堆積物を2~4m発掘して、ようやく下から谷の石切丁場の全容が姿を現したのである。谷の形成は、大坂層群を下刻するもので、写真はその層部付近(第52図)。



A・D地区 谷1右岸断面(東から)

大坂層群が層理をなして再堆積する。流水も著しい。



A地区 本発掘調査第Ⅱ区トレンチ設定状況(南から)

石曳き道が推定されるエリアであり、原位置を保つ石材と転石を見極めながら慎重に掘削を開始した。谷1に至る石材ルートがここを通れば、調査地外山林内の丁場の沢地とも連絡がつく。



A地区 本発掘調査第Ⅱ区西壁断面(南東から)

段丘礫層を母材とする二次堆積層で、礫の包含が多く、湧水が著しい。



A地区 第10地点①トレンチ近景(北から)

調査地で最も標高の高いトレンチである。表土直下で黄灰色の地山層を検出した。石材は少ない。この区域では、大坂層群は深いようだ。



第19調査地点①トレンチ発掘開始・表土剥ぎ（北東から）

発掘調査前より確認されていた刻印石を中心に南北方向にトレンチを設定し、この平坦地に石切丁場が存在することを想定して、表土めくりを開始。掘る前には、草木に覆われ、所々に花崗岩の巨石の一部が顔をのぞかせていた。刻印をもつ割石が単独で存在するのはおかしい。



第19調査地点①トレンチの表土除去状況（東から）

中央に土層観察用の畦を残し、表土と第2層目の山土層の排出作業を終える。この時点で刻印石である91号石材と関係する矢穴痕をもつ割石が次々に出土する。予想したとおり、原位置を保つ元和一寛永期の石材群（丁場）が出現した。谷立地の丁場とはまた異なる。



第19調査地点①トレンチの作業面検出状態（東から）

さらに掘り進めると、現地地表下30～55cmぐらいの所に多数のコッパが散らばる採石作業面が露呈する。コッパは何ヶ所か集中部が認められ、人為的に集められた感じがする。91～93号石材の埋まり方からみて、江戸時代でも後半期の作業テラスと考えられた。



第19調査地点①トレンチの作業面検出状態（南から）

3石が並ぶ91～93号の元和一寛永期の大板城石垣石材。奥の91・92号石材の上端部には、Aタイプの矢穴列痕がみえる。手前の93号石材は、最も深く埋まり、おそらく母岩とみられる。上は割面。下は自然面。91・92号の石材はこの上に乗ることが判る。



第19調査地点①トレンチの作業面検出作業風景（南から）

この丁場の二次的な作業面は、一部表土直下、また一部は山土層を除去する過程でみつけた。コッパは浮きやすく、検出が難しい。



第19調査地点①トレンチの91号石材直下作業面、コッパ集中部検出状態（北東から）

この面は、18世紀後半以降に活動していた丁場に伴うものようだ。



C地区 第19地点①トレンチ遺物出土状況
土壌層と黄色土の境から出土し始めた磁器など。丁場の年代は？



C地区 第19地点①トレンチ(東から)遺物出土状況
浅いところでは、30 cmも掘れば、新しい方の作業面に達する。



C地区 第19地点①トレンチ北端(南から)遺物出土状況
表土直下から白磁薄手猪口(小碗)が出土する。コップも混じる。



C地区 第19地点①トレンチ遺物出土状況
散発的に出土するコップとともに土器類も顔を出す(表土直下)。



C地区 第19地点①トレンチ遺物出土状況
表土直下の作業面から染付磁器碗などが検出された(18世紀)。



C地区 第19地点①トレンチ遺物出土状況
石切丁場から検出される土器などの生活用品は、一般的に少ない。



C地区 第19地点①トレンチ取り上げコップ・出土遺物
コップが出土した遺構面からは、磁器や若下の鉄製品も出土。



C地区 第19地点①トレンチ取り上げコップ・出土遺物
加工時に発生する10~20 cm大のコップと陶磁器の類(18世紀)。



C地区Ⅲ区北半部コッパ面検出状態（南東から）
上層作業面のようす。元和～寛永期ではないと判断した。



サブトレンチ①土層断面 石材接地土壌層と上層コッパ面
作業面が2度あることを立証する土層断面。92・93号石材間。



91・92号石材検出状態（割石第2工程）（南西から）
この2石は、93号石材（母岩）の上を構成していたもの。



サブトレンチ①土層断面 石材接地土壌層と上層コッパ面
石材は新しい方の作業面では、幾分埋没していることが判る。



92・93号石材間の江戸時代初期作業面検出状態（南西から）
石材が移動された面から多数のコッパが出土。作業面とみたい。



サブトレンチ④土層断面 割石第1段階下層コッパ面（東から）
元和～寛永期の石材加工面と思われる。2つ目の作業面。



C地区第19地点①91号石材のCタイプ矢穴割面（東から）
幅4cm程の小さい矢穴。1段階新しい石切作業の跡。新鮮だ。



C地区第19地点①トレンチ92号石材の割面（上面）
石質は、きわめて珍しい花崗斑岩。割面はヒダ状に波打って起伏がある。